

「母語話者信仰」はどのように現れているのか
 -日本国内の非母語話者実習生・教師に関する論考のレビューを通して-
 AN ANALYSIS OF THE INFLUENCE OF “THE NATIVE SPEAKER FALLACY”:
 THE REVIEW OF PAPERS ON NON-NATIVE STUDENT TEACHERS/TEACHERS
 IN JAPAN

孫雪嬌, 早稲田大学
 Xuejiao Sun, Waseda University

1. はじめに

外国語教育においては、「母語話者の言語能力は非母語話者よりも優れている」、したがって「外国語学習の目標は当該言語の母語話者である」、と母語話者の絶対的な権威と優位性を主張するような考え方が根強く存在すると指摘されてきた。本研究はフィリプソン (1992/2013)、中川 (2008) などを参考に、母語話者の言語使用に真正さと権威を付与し、その理由で母語話者を当該言語学習のモデル及び最終的な目標とする、というような外国語学習・教育のビリーフを「母語話者信仰」と定義する。

本研究は、このような母語話者信仰に対抗する新たな言説を立ち上げることを目的としている。そのために、日本国内で日本語教育に携わる非母語話者の教育実習生および教師に関する論考を調査する。論考の歴史的変遷を明らかにし、その上、論考において母語話者信仰がどのように現れているかを分析し、母語話者信仰に対抗するために必要な研究の方向性を模索する。

2. 研究背景—問題の所在

2.1. 外国語教育における母語話者信仰とそれに対する批判

母語話者信仰を議論するにあたり、母語話者とは誰なのかを明確にしなければならない。母語話者の定義に関しては大平 (2009) が詳しい。例としてここでは言語学における「ネイティブ・スピーカー (native speaker)」の定義に大きな影響を与えたとされる Noam Chomsky を取り上げたい。Chomsky の言語理論は「完全に均質な言語共同体における理想的な話し手・聞き手 (an ideal speaker-listener, in a completely homogeneous speech community)」に関心をもつ (安井、1970/Chomsky、1965)。

このようなネイティブ・スピーカーの捉え方に対して、D. Hymes は疑問を投げかけていた。Hymes はネイティブ・スピーカーの言語能力を唯一の絶対的な規則として認めず、ある言語共同体における言語使用は多種多様であることを示そうとした (Hymes、1972)。このようにネイティブ・スピーカーの言語能力への信仰を疑問視するのは他はフィリプソン (1992/2013)、Davies (2003) などが挙げられる。母語話者信仰は外国語学習・教育上の一つのビリーフとして、さまざまな形で我々の生活に浸透している。街中でよく見かける英会話教室の「講師はすべてネイティブ・スピーカー」というような看板を思い浮かべれば、その影響力の根強さがわかるだろう。

母語話者信仰の影響力が根強いゆえに、それに対する批判が外国語学習・教育の重要なテーマの一つとして多くなされてきた。例えば、「当該言語を完璧に操ることができる話者」というような母語話者像が共有された虚構の産物にすぎないと主張する、というようなアプローチがある（例えば、Paikeday 1985）。また、談話や言説などを微視的に分析することにより、優位性が構築されるプロセスや言説の構造を紐解いていく、というアプローチもある（例えば、久保田 2015）。

母語話者信仰への批判が様々なアプローチからなされてきているが、母語話者信仰が克服されているかということ、まだ楽観的に断言できないと筆者は考えている。多くの教師や学習者が母語話者を学習の最終目標としているからこそ、そのビリーフが語学関連産業に巧みに利用されているのではないか。学術研究の世界ではいくら声高に叫ばれても、教育の現場では人々に容易に無批判に受け入れられるというのは、このビリーフの一番警戒すべきところではないか。

2.2. 日本国内における非母語話者の日本語教育実習生・教師

日本国内の日本語教育の現場では実践者というと、日本人あるいは日本語の母語話者が多いというイメージがあるのではないか。文化庁が毎年発表している「国内の日本語教育の概要」において、「教師」の項目は「常勤教師」「非常勤教師」「ボランティア」という三つのカテゴリーに分類されているが、「母語話者教師」、「非母語話者教師」のような分類及びそれぞれの割合に関する調査結果は未だに見られていない（平成 27 年現在）。国内において非母語話者教師がごく少数で、統計を取るに値する規模をなしていないという理由が推測できよう。一方、一部の日本語教育関係者の間で、日本国内で非母語話者実習生や現職の非母語話者日本語教師が存在しているという認識が徐々に広まってきた。日本国内で非母語話者の実践者がいることで、「日本語を教える人＝日本人/日本語母語話者」という単一的な図式が成立しなくなった。日本国内で非母語話者の実習生・教師が存在するようになった以降、実習生・教師をめぐる問題も認識されるようになり、実習生・教師を対象とする研究が始められた（詳細は第 5 節）。

2.3. 日本国内の非母語話者実習生・教師に関する論考を通して母語話者信仰を考察する意味

人数の面においては、日本国内では非母語話者実習生・教師は母語話者実習生・教師と比べて少数派であることはおそらく事実であろう。日本国内で「日本語を教える人＝日本人/日本語母語話者」というイメージが従来から広く共有されている中、非母語話者実習生・教師が不利な状況に置かれることは容易に想像できる。例えば、学習者や教育機関にとって認知度が低い可能性がある。また、日本国内のほとんどの現場では、「学習者と社会文化的背景を共有している」「学習者の母語で説明できる」などのいわゆる「非母語話者教師ならではのメリット」が発揮できない、という現状がある。望まれるメリットが発揮できず、且つ「完璧な話者」だと拝められる母語話者教師が大勢いる中、非母語話者実習生・教師の存在意義がどこにあるのか。このような疑問が生まれても不思議ではない。国内の非母語話者実習生・教師の実践には、母語話者信仰の問題がよく現

れると考えられる。従って、そのような実習生・教師を扱う研究において、母語話者信仰がテーマにされたり、それに関して語られたりする可能性が高い。

2.4. 本研究の目的

上述のような考えで、本研究は、日本国内の非母語話者実習生・教師に関する文献の調査を通して、日本語教育における母語話者信仰の問題を考察する。まず、日本国内の非母語話者実習生・教師に関する論考の動向を把握する。それから、論考において母語話者信仰がどのように現れているかを分析する。その上で、母語話者信仰に対抗するために、今後必要な研究の視点を提示することを試みる。

3. 用語の定義

本研究のキーワードとなる三つの用語を以下のように定義する。

- A) 「母語話者」：Davies (2003) は母語話者という概念の神話的な側面 (p.2: “the myth-like properties of the native-speaker idea”) を認めつつ、その概念が実際に我々の生活に広く流布し深く浸透していることから「現実」 (p.2: “a reality”) でもある、と述べている。母語話者の概念の日本語教育への大きな影響を考慮した上で、本稿においてさしあたり、多くの研究で使われる「母語話者」という仮の概念を用いる。さらに「時間説」 (大平前掲, p.88) の立場を取り、ある言語を母語 (mother tongue) または第一習得言語 (first-learned language) として身につけている人を指している。
- B) 「日本国内の非母語話者教育実習生・教師」：日本国内で教員養成を受けている非母語話者の日本語教育実習生・現職の非母語話者教師を指している。
- C) 「非母語話者実習生・教師に焦点をあてた論考」：タイトルあるいはキーワードに「非母語話者教師」、「ノンネイティブ教師」、「非母語話者実習生」などが含まれる研究や実践報告などを指す。当該の論考は何らかの問題意識で、実習生や教師が非母語話者である属性に注目していると考えられるからである。また、本稿において「研究」や「論文」などではなく「論考」を用いるのは、『月刊日本語』のような、研究論文ではなく、人物インタビューで国内の非母語話者実習生・教師を取り上げた雑誌もあるからである。

4. 研究方法—調査対象論考の選定と分析の手順

まず、日本国内の論文書誌のデータベース「CiNii Articles」 (国立情報学研究所) を用い、日本国内の非母語話者実習生・教師に焦点をあてた論考を検索した。その際に、「日本語」と「教師」あるいは「実習生」を必須のキーワードとしている。必須のキーワードを、非母語話者という属性を表すキーワード (「非母語話者」「ノンネイティブ」「NNS」「NNT」「外国人」) と組み合わせ、検索を行った。検索の結果から、論考の要旨や本文などを通して、国内の非母語話者実習生・教師に焦点をあてたと判断したものを選出した。

検索結果を補足し、且つ戦後の日本語教育の歴史を把握するために、市嶋他 (2014) を参考にし、以下の3種の刊行物の論考もレビューした。(1) 『日本語教育』 (日本語教育学会) (2) 『日本語教育論集』 (国立国語研究所)、『世

界の日本語教育』（国際交流基金）（3）大学院課程にて日本語教師養成を行っている大阪大学、お茶の水女子大学、筑波大学、広島大学、早稲田大学のそれぞれの紀要。また、「CiNii」検索の結果から、お茶の水女子大学大学院の「多言語・多文化共生日本語教育実習」において、非母語話者実習生に注目する研究が多くなされていたことがわかった。そのため、岡崎（2007）も調査対象に加えた。

上記の手順に沿って選考した結果、今回は25本の論考を調査対象と判断した（資料）。この25本の論考に対して、まず掲載年順に並べ、論考の数の変化を把握した。次に、「背景」「目的」「結果」「日本語教育への提言」などの項目を軸に論考の情報をマトリックスにまとめ、内容を概観した。さらに、母語話者信仰との関連が考えられる内容、たとえば、母語話者・非母語話者の権力関係や言語使用の規範に起因する葛藤などに注目していた。そのような内容を取り出し、母語話者信仰に対する論考の立場やアプローチ、結論などを整理した。

5. 分析結果—論考の歴史的変遷

分析の結果、「非母語話者教育実習生」と「非母語話者教師」に焦点をあてた論考は、異なる変遷の特徴が見られた。

5.1. 国内の非母語話者教育実習生に焦点をあてた論考

今回の25本の論考のうち、12本は非母語話者教育実習生に焦点をあてたものである。分析の結果、論考の歴史的変遷の特徴は以下の2点にまとめた。

まず、2005年以前に国内の非母語話者実習生に関する論考がほとんど見られないものの、2005年前後から、非母語話者実習生を取り上げる論考が顕著に増加していた。文化庁の「日本国内の日本語教師養成・研修の受講者数（国・地域別）」に関する調査から、2004、2005年以降、外国籍の受講生が占める割合が右肩上がりが増えていった傾向が見られる（文化庁）。2005年以降は非母語話者実習生に焦点をあてた論考の出現と増加は偶然ではないと言えよう。

それから、非母語話者実習生に特化する養成への関心の高まりも指摘したい。非母語話者受講者数の増加に応じるような形で、特に2010年以降、非母語話者実習生のための教員養成がどうあるべきかを考える研究がみられるようになった（加納2010、大和2014など）。これらの研究は、既存の養成課程が主に母語話者を対象に設計されてきたため、非母語話者実習生のニーズに合わないのではないかという問題意識をもっている。研究の結果を以って、非母語話者実習生に特化した養成の望ましい目標やシラバスなどを提言した。たとえば、教育実習の際に「（筆者注：直接法で教える）だけではなく、日本語非母語話者の実情にあった方法でのトレーニングも今後考えていく必要がある」（大和2014、p.49）。

5.2. 国内の非母語話者教師に焦点をあてた論考

今回の25本の論考のうち、13本は非母語話者教師に焦点をあてたものである。この13本の論考を分析した結果、歴史的変遷は以下の2点の特徴が見られた。

1点目は、現職の教師に注目する論考はまだ非常に限られているという現状である。教師対象のものは13本あり、今回取り上げた論考の半分以上占めている

が、その中で、7本は人物紹介記事であることに留意しなければならない。つまり、現在国内で非母語話者教師は依然として認知度が低く、教師たちへの研究関心も非常に低いといわざるをえない。国内の日本語教師に広く読まれる雑誌で非母語話者教師の体験談を紹介することは、教師の存在を周知させる効果が期待できる。一方で、科学的な方法で問題点を浮き彫りにし、改善策を提示することを目指すならば、「研究」が必要不可欠であろう。今後の課題の一つは、国内の非母語話者教師に研究のスポットをあて、教師たちをめぐる現場の問題点を明らかにし、広く認知させることであろう。

2点目は、今回分析した非母語話者教師対象の論考は、「インタビュー記事→理論研究→実践を反映する研究」というように内容の変遷の軌跡が確認できた。

まず、1980年代末～2000年代中盤に、国内における非母語話者教師は個別事例の形で存在を提示されはじめていた。今回の調査の範囲内では、1989年4月号の『月刊日本語』に掲載されたアメリカンスクールで日本語を教えている一人のアメリカ人教師へのインタビューは、国内の非母語話者教師の存在を報じた先駆的な論考であるとみられる。『月刊日本語』は、当時まだ珍しい存在である非母語話者教師を取り上げ、そのような教師たちをパイオニア的な個別事例として紹介し、業界に認知させるという意図が読み取れる。

同じく2000年代中盤までの時期に、カイザー（1995）、石井（1996）などは国内における非母語話者教師の役割と重要性を理論的に分析していた。これらの論考は国内の教師がその後多様化していくという変化を真っ先に察知し、国内における非母語話者教師の存在の意義を提起している。

2000年代中盤以降、ようやく非母語話者教師の実践を扱うような研究が現れるようになった。辛による一連の研究（辛2006、2007、2008など）は、大学の留学生日本語教育機関における現職の非母語話者教師に焦点をあてた先駆的な研究だと思われる。その後非母語話者教師に焦点をあてた研究としては、高橋

（2015）が挙げられる。高橋（2015）はある程度の教師経験をもつ大学の非母語話者教師にインタビューし、教師たちが教えてきた経験を詳細に聞き取っていた。前述の辛と比べ、国内の非母語話者教師像がより具体的になり、国籍や母語に囚われない教師の捉え方を提言している。

6. 母語話者信仰に関する考察

今回の対象論考は、母語話者信仰をどのように議論してきたのか、それに対してどのような態度を取っているのかについて考察を述べていく。

6.1. 母語話者信仰はどのように議論されてきたのか

今回分析対象とした論考において、母語話者信仰をテーマとして取り上げるものは見当たらなかった。一方で、論考の背景として母語話者信仰の影響への言及は散見された。言及の仕方は、以下の三つの種類が見られた。

一つ目は、先行研究の結果などを根拠に、母語話者の優位性と非母語話者の劣等感を危惧するような研究である。多くの論考の問題意識では、阿部・横山（1991）の調査結果を引き合いに出している。阿部・横山（1991）は母語話者と

非母語話者の教師としてのそれぞれのメリットとデメリットに関する意識調査である。調査の結果、正確に日本語が使えることや、日本の社会文化に関して豊富な知識をもっていることは、母語話者のメリットとして多く取り上げられた。その反面、調査協力者である非母語話者教師の多くは日本語力の不足に注目するあまり、非母語話者であることを否定的に捉える傾向があると報告している。この調査の結果は、母語話者の優位性と非母語話者の劣勢が教師の共通認識であることの裏付けとしてその後の研究に受け入れられている。この結果への危惧から、非母語話者実習生の自己受容を促したり（たとえば、野々口 2007）、非母語話者教師の存在の意義を主張したり（たとえば、高橋 2015）する研究が行われた。

二つ目は、調査者あるいは調査協力者の見聞きした「母語話者の優位性」を支持するような言説や出来事を問題の左証として言及するような論考である。たとえば、『月刊日本語』の1994年9月号において、国内外で教える母語話者教師と非母語話者教師による座談会が紹介された。ネイティブ教師とノンネイティブ教師のそれぞれの長所と短所について聞かれ、教師たちはアンケート調査で得た「一般論」ではなく、現場で感じている長所・短所を説明していた。その中で、作文の添削が例として取り上げられ、ある教師の現場では、学習者が「日本人の先生の添削を信用するが、ノンネイティブの方を信用しない」という。教師と学習者のビリーフが互いに影響しあうと言われる。学習者の母語話者への擁護は、教師にとって「母語話者の優位性」の「証拠」の一つとされる可能性がある。

三つ目は、非母語話者による研究である。現場で実際に自分が実践者として感じていた不安やプレッシャーなどをインタビューで語ったり、あるいは研究の問題意識として綴ったりするものが多い。たとえば、蔡（2015）では、実習で「媒介語を使わずに分かりやすく説明できるか」、「自分の発音は正しいか」、「学生に自分の日本語を信頼してもらえるか」などの不安を抱えていたことを説明していた。その中で、指導教員からの文法や発音の指摘がプレッシャーになった一方、不安を軽減するために自分の作成した教材や教案を母語話者にチェックしてほしい、とも望んでいる。このように、非母語話者実習生・教師が当事者だからこそ語れる葛藤を通して、母語話者信仰が教師の自己認識への大きな影響がうかがえる。非母語話者の不安や不利な立場に立たされている現状が鏡となり、母語話者信仰の問題点を逆照射している。

6.2. 母語話者信仰に対する態度

論考において、研究背景として母語話者信仰に言及するにとどまらず、「母語話者信仰への対抗」、すなわち母語話者信仰を批判する態度あるいはそれを覆すような実践、言説を立ち上げる試みがみられた。一方、母語話者信仰を受け入れ、あるいはそれをさらに強化するような言説もみられた。

6.2.1. 母語話者信仰への対抗—エンパワーメント

母語話者信仰への対抗として、エンパワーメントが多く見られた。すなわち、非母語話者の有能さやメリットを強調することにより、「母語話者が最も良い学習のモデル」という信仰に対抗する。それから、エンパワーメントより一歩進み、

日本語教育の目的を根本的に見直すことにより、従来の非母語話者の弱い立場を変える、というような論調も少ないながらも見られた（清水、2008）。

筆者は、非母語話者実習生・教師の認知度が低い現状の中で、エンパワーメントは、非母語話者実習生・教師の国内の現場への参入を促進できるストラテジーとして大いに活用すべきだと考えている。一方で、英語教育等においてすでに指摘されているように、エンパワーメントのストラテジーは母語話者が優位にあることを疑う余地のない前提としており、権力関係の構造の問い直しにはなっていない、という限界がある（たとえば、Doerr2009）。エンパワーメントを必要としつつも、日本語教育における母語話者・母語話者教師の優位性の問題を今まで以上に俎上にのせ、それに対して揺さぶりをかけるべきだと認識している。

6.2.2. 母語話者信仰の受容と強化

母語話者信仰に対して対抗するような立場をもち、それをはっきりと表明するような論考はある一方、母語話者の有能性と非母語話者の能力の不十分さを「事実」のように語り、それを無批判に受け入れるというような論考も見られた。

たとえば、加納（2010）は大学院の日本語教師養成の授業を受講した母語話者の学生、非母語話者の学生の双方に「ネイティブ教師のいいところと、ノンネイティブ教師のいいところ」を調査した。その結果は阿部・横山（1991）とほぼ合致している。調査協力者たちは、長所と短所は教師の個人の特性や言語の使用場面、実践場面などと関係なく、確固たる事実のように語っていた。あたかも母語話者・非母語話者なら誰でも共通して持って生まれつきで変わらぬ性質のようなものであり、それに対して特に疑問や反対の態度が見られない。

さらに、母語話者信仰を強化するような論考としては、例えば陳（2012）が挙げられる。陳では実習生として自己評価チェックリストを利用し非母語話者教師の利点を挙げる。その上、養成側に対して、実習生の教案が文法的な間違いがないか、用例が適切かどうかなどを常に母語話者に確認する必要があると提言している。また蔡（2015）は実習の経験を振り返り、非母語話者実習生としての不安要素を洗い出した上、「今後は学習者にとって役に立つ日本語を教え、日本文化、日本人の考え方や日本での生活習慣を正確に伝えられる」（傍点は筆者による）ことを教師の役割として認識し、実践していく意気込みを語っていた。これらは、まさに母語話者教師が言語的に常に正確で、用例が豊富で、運用も正しく、社会文化的知識の代弁者であるという信仰を表しているのではないか。そして非母語話者の学習者・実習生・教師は、常にたゆまぬ努力によって無限にそのモデルに近づいていくべきだ、という主張が読み取れる。

7. まとめ

本稿では、日本国内の非母語話者教育実習生・教師に焦点をあてた論考を調査し、論考の変遷を概観した。その上、母語話者信仰が論考でどのように議論されてきたかを考察した。対象論考はほぼ全て母語話者信仰について言及していることは、【2.3】で述べた筆者の当初の予想を裏付けている。日本語教育における

母語話者信仰を批判しそれに対抗するために、日本国内の非母語話者教育実習生・教師という観点からアプローチする可能性が大いにあるといえよう。

これからの課題の一つとしては、英語教育や日本語教育を含む外国語教育における母語話者信仰、言語の規範性などに関する理論を整理し、理論的な枠組みあるいは拠り所をもって、今回の文献調査の分析結果を解釈することだと考えている。国内の非母語話者教育実習生・教師の観点から、母語話者信仰に対抗する可能性をさらに探求していきたいと思う。

参考文献

- 阿部洋子・横山紀子（1991）「海外日本語教師長期研修の課題—外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて」『日本語国際センター紀要』1,53-74
国際交流基金日本語国際センター
- 市嶋典子・牛窪隆太・村上まさみ・高橋聡（2014）「実践研究はどのように考えられてきたか—日本語教育における歴史的変遷」細川英雄・三代純平（編）『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』23-48 ココ出版
- 大平未央子（2009）「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子・山下仁（編著）『新装版「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』85-110 三元社
- 久保田竜子（著）奥田朋世（監訳）（2015）『グローバル化社会と言語教育—クリティカルな視点から』くろしお出版
- 中川亜紀子（2008）『母語話者信仰を支える「言説」批判—日本のドイツ語教育に関する分析を手がかりに』大阪大学博士論文（未公開）
- フィリップソン, R.（2013）平田雅博・信澤淳・原聖・浜井祐三子・細川道久・石部尚登（訳）『言語帝国主義：英語支配と英語教育』三元社. (Phillipson, R. (1992). *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.)
- 文化庁 日本語教育実態調査等 <http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/>（アクセス日：2017年7月18日）
- 安井稔（訳）（1970）『文法理論の諸相』研究社（Chomsky, Noam. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The MIT Press.)
- Davies, Alan. (2003). *The Native Speaker: Myth and Reality*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Doerr, Neriko Musha. (2009). Investigating “native speaker effects”: Toward a new model of analyzing “native speaker” ideologies. In Doerr Neriko Musha (Ed.), *The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects*, 11-46. Mouton De Gruyter.
- Hymes, Dell. (1972). On communicative competence. In J. B. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics: Selected Readings*, 269-293. Harmondsworth: Penguin.
- Paikeday, T. M. (1985). *The Native Speaker is Dead!*. Toronto, Ont.: Paikeday.

資料 分析対象論考一覧

番号	著者名	発行年	タイトル	収録刊行物
1	アルク	1989	アメリカ人の日本語教師	『月刊日本語』1989年4月号、62-63
2	アルク	1990	自分が習った経験を教える土台に	『月刊日本語』1990年11月号、54-55
3	アルク	1991	実力次第で道は開ける—留学生から日本語講師へ	『月刊日本語』1991年10月号、54-55
4	アルク	1994	国内で活躍するノンネイティブ教師	『月刊日本語』1994年9月号(特集「ライバルは「ノンネイティブ日本語教師」」)、12-15
5	カイザー・シュテファン	1995	ノンネイティブ日本語教師の役割—異文化間教育の現場としての日本語教室を目指して	『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10、95-106
6	石井恵理子	1996	非母語話者教師の役割	『日本語学』15(2)、87-94
7	アルク	2001	それぞれの立場から—教師の声	『月刊日本語』2001年5月号、30-31
8	アルク	2002	ノンネイティブ教師座談会—学ぶ立場から教える立場へ	『月刊日本語』2002年2月号、20-23
9	丸山具子 他	2005	チームティーチングについての一考察—日本語教育実践研究(1)を通して(日本語教育実践研究「待遇コミュニケーション教育/学習」の実践)	『早稲田大学日本語教育実践研究』3、3-12
10	アルク	2006	鄭相美さん「後輩である留学生に可能性を与えられる存在になりたい」	『月刊日本語』2006年3月号、9
11	辛銀眞	2006	日本国内の非母語話者日本語教師に対する学習者のビリーフの変容—早稲田の初級実践を通して	『講座日本語教育』42、60-81
12	辛銀眞	2007	日本語のフォリナー・トークに関する一考察—非母語話者日本語教師の意識調査を通して	『早稲田大学日本語教育学』1、25-37
13	平野美恵子	2007	多文化共生指向の日本語教育実習での非対称な関係性に見る実習生間の学び—準備期間3ヶ月の話し合い分析	岡崎眸(監修)『共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために』雄松堂、pp.65-84
14	野々口ちとせ	2007	非母語話者実習生の自己受容—内省モデルに基づく共生日本語教育実習の場合	同上、pp.115-126

15	古市由美子	2007	多言語多文化共生日本語教育実習を通して見た非母語話者教師の役割	同上、pp.127-139
16	朱桂栄・ 単娜	2007	共生日本語教室におけるインターアクションに関する一考察—母語話者実習生及び非母語話者実習生の IRF モデルによる比較	同上、pp.249-269
17	清水寿子	2008	共生日本語教育が日本語非母語話者に与える教育的意義に関する一考察—ある教育実習生の事例から	『多言語多文化—実践と研究』1、123-146
18	辛銀真	2008	日本国内接触場面のフォリナー・トーク使用に関する一考察—非母語話者日本語教師の会話調査を通して	『早稲田大学日本語教育学』3、25-38
19	張瑜珊・ 穆紅・ 野々口ちとせ	2009	実習体験で教師イメージがどのように変わるか—PAC 分析による非母語話者実習生の事例研究	『日本語教育論集』25、35-50
20	加納千恵子	2010	大学院における日本語教師養成の課題—ネイティブ・ノンネイティブによる教師役割観の違い	『国際日本研究』2、99-116 筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻
21	趙乃音	2011	非母語話者日本語教師の文法教育能力改善の試みについて	『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』2、75-95
22	陳良慶	2012	教育実習を通じて見えてきた非母語話者日本語教師の利点	『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』3、206-230
23	大和裕子	2014	日本語非母語話者を対象とした日本語教育実習—アンケート結果からの考察	『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』13、35-50
24	蔡欣芳	2015	教育実習を通して見えてきたもの—非日本語母語話者実習生としての不安要素と教師像の変化	『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』6、147-171
25	高橋雅子	2015	国内の日本語教育における非母語者教師に関する考察—多文化共生社会における語学教師の多様性を問う	『日本語教育実践研究』2、立教日本語教育実践学会、104-113